

2011年度同志社大学今出川キャンパス整備に伴う立会調査

—鏡鑄型の出土事例報告—

馬淵一輝

1. はじめに

2011年度の同志社大学今出川キャンパス整備に伴う立会調査において、近世の鏡作りにおいて使用されたと考えられる土製の鏡鑄型が出土した。鏡の文様を表現する真土にあたる部分は、全て剥落して残っておらず粗型と一部に下真土が残っていた。出土した地点が近世の相国寺門前で、京都御所のすぐ北に立地していることから重要な遺物と考えられるので速報として報告する。

2. 出土地点

出土地点は同志社大学今出川キャンパスクラーク記念館南側に設定した6s-4-①調査区である。現地表面より1.0m程掘り下げた地点で長方形の配石土坑が確認され、炭化物の多く混じった灰色土(土坑埋土)の中から鑄型、埴塼、陶磁器片などが出土した。廃棄土坑と考えられる。配石は一段組で、時期は共伴した陶磁器から18世紀後半と考えられる。



図1 調査区(6s-4-①)位置図(S=1/5000)

3. 鑄造関係の出土遺物

鑄型の表裏を判定することが難しく、便宜上実測図に示された左側をA面、右側をB面とする。

1～7は、柄に想定される部分を持ち、柄鏡の鑄型として使用された可能性が高いものである。

1は、残存長18.9cm、残存幅14.7cm、厚さ2.4cmを測る。復元形は総長約28cm、鏡面部幅18.5cm程の大きさになると想定される。A面は鑄型の中央に黒色変化した下真土を残す。また、一部に少量の金属が付着する。粗型は下真土を残しその周辺は赤色変化している。下部には人為的に凹ませた痕跡が確認できる。柄鏡の柄の部分から湯を流した湯口が切られていたと想定される。B面は下部の格子目がナデ消されており断面も薄くなっている。側面は被熱が大きい面が幅広に作られており、ヘラ状の工具でケズリ調整を行っている。表面は全て滑らかに仕上げられている。

2は、残存長17.8cm、残存幅9.0cm、厚さ2.9cmを測る。復元鏡面部幅は16.2cm程の大きさになると想定される。A面は比較的格子目が深めに刻み込まれている。下部から鳥目にかけての損傷が激しい。表面は全体的にざらついているものの一部滑らかなまま残っている部分もある。B面は表面の損傷が激しく格子目がうっすら確認できる程度になっている。A面と同様に下部から鳥目にかけて特に損傷が激しい。他の鑄型と比較して特に鳥目が小さいことが特徴である。

3は、残存長6.6cm、残存幅8.3cm、厚さ2.5cmを測る。復元鏡面部幅は20.4cm程の大きさになると想

定される。A面は表面の損傷が激しく格子目がうっすらと確認できる程度になっている。縁部より1mmを除くほぼ全面が白色変化している。B面はA面よりも損傷が少ない。表面は両面とも全体的にざらついている。

4は、残存長9.1cm、残存幅5.8cm、厚さ2.5cmを測る。A面は特に損傷が激しい。格子目が両面とも細く薄く刻み込まれているのが特徴である。A面側の側面がかなり丸みを帯びている。

5は、残存長8.2cm、残存幅10.4cm、厚さ約1.7cm前後を測る。A面は完全に剥離しており、粗型中に含まれるモミガラがよく観察できる。縁部のモミガラは縁部に対して幅1.1cm程度で平行に並んでいる。時代は違うが網伸也氏のいう粗型が型押し技法で作られていた場合、隅に棒状の土を押し固めて粗型を成形した可能性が指摘できる。B面は格子目の工具が斜めに入っているのがよく観察でき、表面は滑らかに仕上げられている。

6は、残存長10.0cm、残存幅4.9cm、厚さ3.3cmを測る。A面は一部を除いてほとんどが剥離している。B面は多くの個所に黒い斑点状のものがこびりついている。格子目は比較的細かく薄く刻み込まれている。断面では縁部の胎土の流れが良く観察できる。5と同様に粗型製作に際しての貴重な資料と成り得る。

7は、残存長12.1cm、残存幅6.2cm、厚さ3.4cmを測る。A面は特徴が6のB面と似る。B面は損傷が激しくうっすら格子目が確認できる程度である。燃焼の度合い、格子目の大きさの観点から6と7は同一個体であった可能性が高い。

8～14は、円弧を持つ鑄型で鏡面部を作っていたと想定されるものである。中には円鏡を作っていた可能性が高い鑄型も含まれる。

8は、残存長8.5cm、残存幅8.4cm、厚さ2.3mmを測る。B面は下真土を残す。全体的に黒っぽく焦げているのが特徴であり下真土は1mm程度の厚さで残っている。後述の9の鑄型と円弧・鳥目の位置・厚さが一致することから同じ型で作られた可能性が高い。A面の格子目の大きさも同程度である。

9は、総長18.7cm、鏡面部幅17.3cm、厚さ2.2cm、鏡面径10cm前後を測る。唯一、完形のまま出土した鑄型である。雫型に成形されており柄鏡を作っていたか円鏡を作っていたかの判断が難しい。しかし、A面では湯口の可能性が想定できる。縁部から鳥目に向かって伸びる燃焼痕が右と下の両方に確認できるため、同じ粗型で柄鏡と円鏡の両方を作っていた可能性が指摘できる。また、鏡縁部に相当すると考えられる個所は薄く下真土を残し他の個所に比べて損傷が激しい。B面は燃焼痕が斑に白色変化している程度である。両面とも格子目の線は直線では無く途中から左へ反れる。表面は全体的にざらついている。

10は、残存長10.5cm、残存幅9.1cm、厚さ2.7cmを測る。被熱の度合いが両面ともに同程度である。A面は赤色変化している線が二条確認でき、ここに鏡縁部の痕跡を指摘しておきたい。B面は側面が剥落しているのが特徴である。両面ともに鳥目があったとされる方向につれて表面が粗くなっている。

11は、残存長5.9cm、残存幅4.0cm、厚さ2.4cmを測る。全体的にかなり損傷が激しく角が丸みを帯びている。胎土も石英を多く含みかなり脆い印象を受ける。B面には全面に下真土を残す。

12は、残存長10.7cm、残存幅18.5cm、厚さ3.7cmを測る。A面は格子目の線が三条入っているのが特

徴である。出土遺物の中では唯一の例である。B面は格子目が施されていない。指紋が一部残っている。側面はB面につれて膨らんでおり、ヘラ状の工具によると思われるナデ調整が顕著に確認できる。他の鋳型と比較して厚めに作られており胎土もキメの細かい土で石英等の含有量が少ない。断面を観察するとヒビが層状に入っているのがよく確認できるので、何度も粘土を重ねて押し固めて作られたことが想定できる。このことは今回の多くの出土鋳型に確認できる事例である。表面は全て滑らかに仕上げられており全体的に丁寧な印象を受ける。

13は、残存長9.6cm、残存幅7.1cm、厚さ2.6cmを測る。A面は格子目一マスの大きさが比較的大きい。B面は格子目が施されていない。縁部につれて膨らみがある。表面は全体的に滑らかに仕上げられている。

14は、残存長7.9cm、残存幅7.3cm、厚さ4.6cmを測る。A面はかろうじて表面の一部が残る程度である。B面は格子目が比較的乱雑に刻みこまれているのが特徴である。出土鋳型中最も厚く作られており、側面はヘラ状の工具によると思われるナデ調整が確認できる。

15・16は円弧を持ち縁部に傾斜が変化する特徴を持つものである。

15は、残存長7.2cm、残存幅5.4cm、厚さ2.5cmを測る。表面は全体的にざらついている。特徴として側面の角度が鋭角になっている点が指摘できる。

16は、残存長5.5cm、残存幅6.7cm、厚さ2.6cmを測る。端部の損傷が激しくA面が特に激しい。側面の一部に下真土に使うようなキメの細かい土が付着している。

17～19は円弧を持たず縁部に丸みを持つものである。

17は、残存長10.4cm、残存幅16.3cm、厚さ2.7cmを測る。鳥目を持つので鏡面部にあたる部分と想定されるが、歪な形をしているのでどのような鏡を製作したか想定し難い。B面は全体に木目の様な痕が確認できる。

18は、残存長12.1cm、残存幅9.8cm、厚さ2.7cmを測る。A面は格子目が薄く刻み込まれており、表面は滑らかに仕上げられている。B面は格子目が刻み込まれていない。しかし、A面よりも表面の損傷が激しい印象を受ける。

19は、残存長9.7cm、残存幅9.8cm、厚さ2.7cmを測る。A面は格子目が深く刻み込まれており所々剥離している。表面は滑らかな部分もあればざらついた部分もある。格子目の断面をみると格子目を入れた工具が斜めに入っているのが観察できる。部分的に工具がこすってしまったような傷が確認できる。B面はA面よりも損傷が激しく表面は全体的にざらついている。側面には形状を変えるために削り込んだ痕が確認できる。残存している形状から方形の鋳型に転用した可能性が指摘できる。

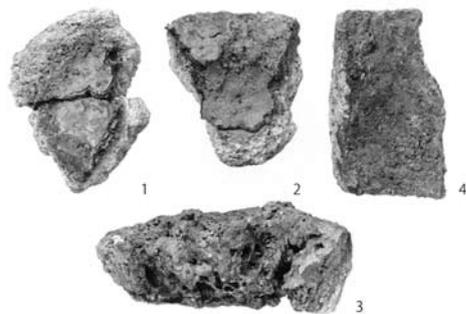


写真1 出土した埴塼(1～3)・屏風(4)

20・21は鳥目を持ち縁部を持たないものである。

20は、残存長8.3cm、残存幅8.0cm、厚さ2.7cmを測る。A面は鳥目周辺と格子目の隙間に黒色変化した下真土

を残す。B面は鳥目から縁部に向かって粗型の色が変化していく様子が確認できる。

21は、残存長7.7cm、残存幅9.5cm、厚さ2.7cmを測る。両面ともに下真土を残す。胎土が粗く石英や長石の量が多いためぼろぼろと崩れてしまう。

その他、鑄造関係の遺物として坩堝と屏風が出土した。坩堝の中には銅とともに不純物・炭化物が大量に含まれており、坩堝は最後に不純物・炭化物を中に入れた状態で廃棄された可能性が考えられる。

4. おわりに

以上、今回出土した鏡鑄型について報告した。鑄型の詳細な観察から近世鏡鑄型の粗型製作技法と鏡の鑄造方法について考えてみたが2点の可能性が指摘できた。1点目は指摘にとどまったが、断面の胎土の観察を詳細に行うことにより製作技法に伴う注目すべき痕跡が見つかるだろう。他の資料も含めた検証を今後の課題としたい。2点目は一つの粗型で柄鏡も円鏡も両方を製作し、また粗型の形を変えて方鏡の粗型へと転用した可能性である。

最後に現代の鏡作りにおいては鏡の仕上げに際して朴炭、駿河炭など特徴的な炭が鏡面の研磨剤として使用され、鑄造を行う際には燃料として一般的な木炭が使用されている。工程に応じて炭の種類が異なるといえる。冒頭でも触れたとおり今回の調査では多くの炭とともに鏡鑄型が出土した。今回の調査では取り上げることができなかったが、どの種類の炭が出土したかにより、その場で行われた鏡生産工程の復元に有効資料となりえ、発掘調査に際しては遺構の性格を知るためにも炭化物を含め微細資料を細かく丹念に取り上げ分析する必要があるだろう。



写真2 山本合金製作所炭研ぎ風景

謝辞

本稿をなすにあたり、山本合金製作所の山本富士夫氏と山本晃久氏には、多くのご教授を賜りました。また、鑄型の検討に際しては立命館大学教授木立雅朗氏よりご助言・ご協力を頂きました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

主要参考文献

- 網 伸也 1996 「和鏡鑄型の復元的考察－左京八条三坊三町・六町出土例を中心に－」『研究紀要』第3号 (財)京都市埋蔵文化財研究所
- 久世康博 1996 「京都・柳馬場通竹屋町出土の柄鏡鑄型資料」『研究紀要』第3号 (財)京都市埋蔵文化財研究所
- 久保智康 1999 『中世・近世の鏡』日本の美術 第394号 至文堂

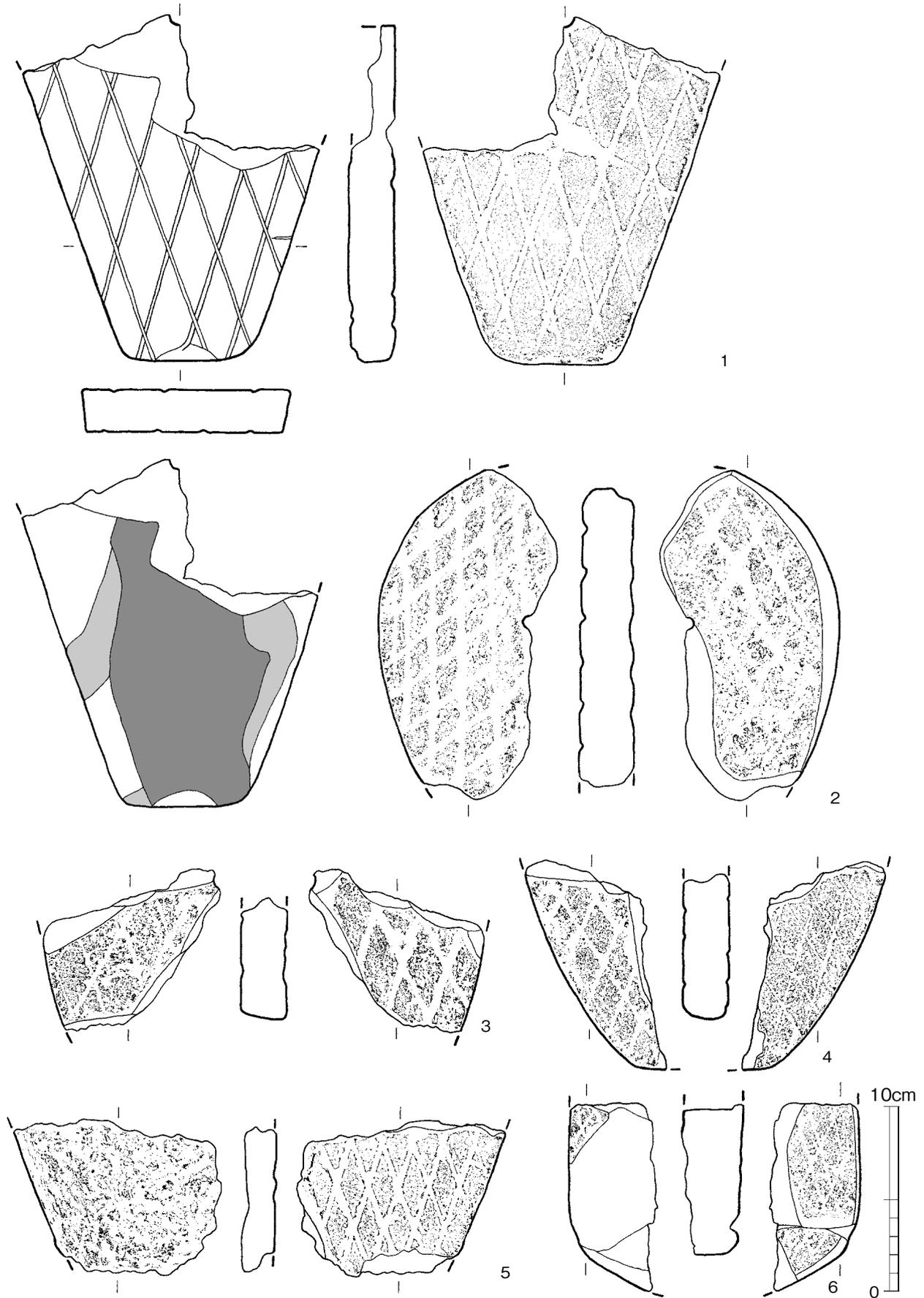


図1 出土した鑄造関連遺物(1) [S=1/3]

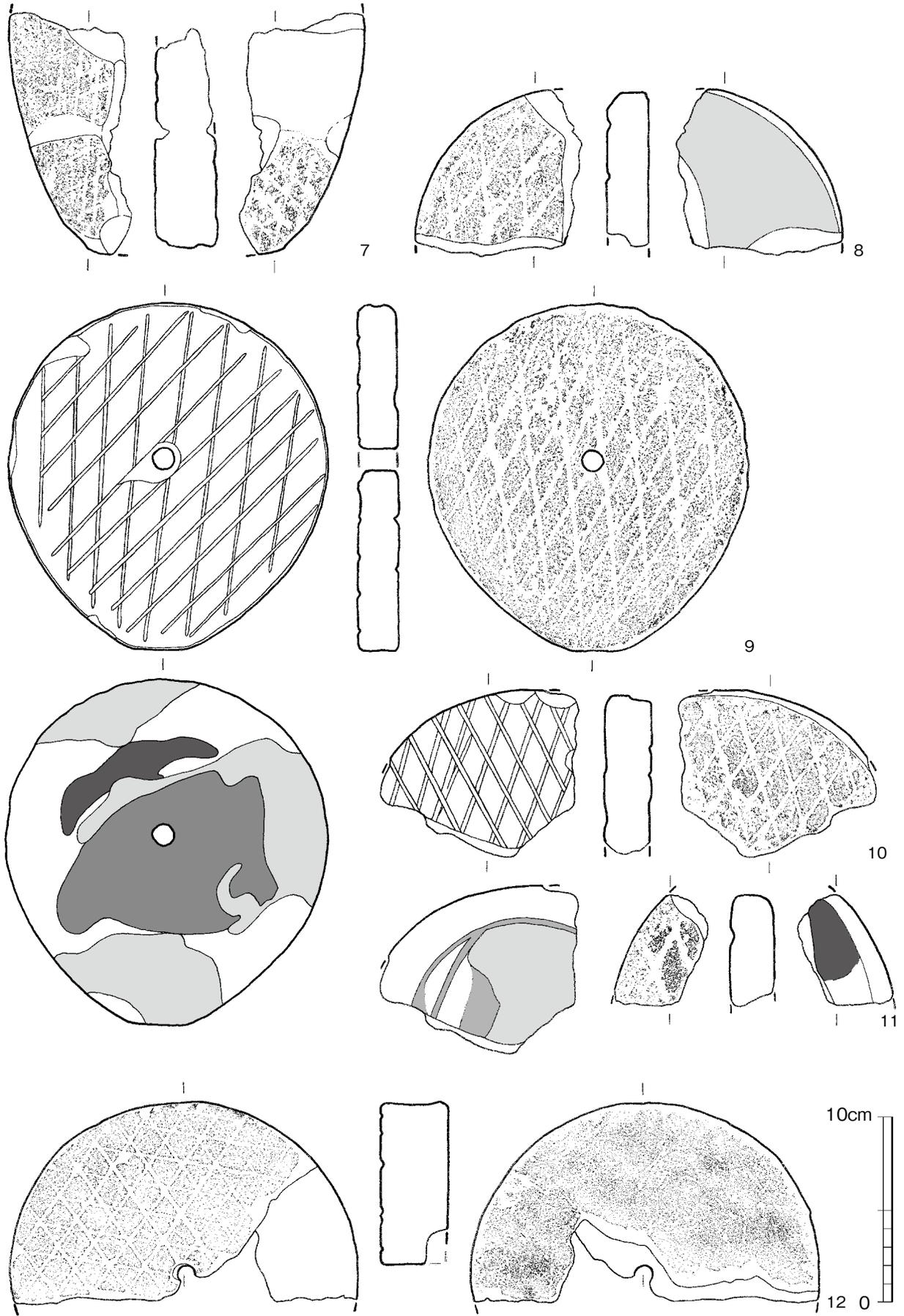


図2 出土した鑄造関連遺物(2) [S=1/3]

